

令和6年度博物館実習生製作企画展示

令和6年8月11日(日)

【1 班】

1 タイトル 「植物標本～時をかける植物～」

2 趣旨

標本とは何かを示し、具体的に植物のさく葉標本の作成方法を展示することで、博物館における標本としての保存・研究・記録・教育につながることを伝える。

標本とは、資料を長く保存できるような状態にし、研究や教育の場で使われるために収集されたものである。化石や動物の剥製、昆虫標本や植物のさく葉標本など様々なものがある。植物は採集しても枯れてしまってもそのままでは研究には向かないものもあり、さく葉標本・アクリル封入標本・液浸標本など使用目的に合わせて処理を施している。身近な物として植物を挙げ、さく葉標本の作成過程を示す。

さく葉標本の作成方法は、まず植物を採集し、その場所や日付などをメモし、その植物が何なのか同定する。同定が終わった植物をはさみ紙に挟み重しを置いて乾燥させ押し葉を作る。その後台紙に張り付ける。台紙にはその植物の情報を細かく記したラベルも貼り、完成する。

さく葉標本を作る流れで、重要な同定作業や、押し葉にする際の葉の広げ方、標本を保存し研究に必要な情報を記すラベルの書き方など重要なポイントにも焦点をあて、さく葉標本が作られる意味を分かりやすく伝える。また、標本には種類があり、展示や研究、保管の目的により、さく葉標本では適さないものもある。そのため、教育や展示に適したアクリル封入標本や、さく葉標本を作ることが難しい植物に適した液浸標本があることも紹介する。

植物を博物館資料という視点から見たり、触れたりすることで植物標本についての理解を深めることを目的とする。

【2 班】

1 タイトル 「ふるさとから飛び出す生き物」

2 趣旨

生物の生息範囲は、もともと生息していた地域から連続的に広がっていくものである。しかし、人為的な要因により、本来の生息地から離れた地域で生息している場合がある。

外来種とは、もともとその地域に存在しなかったが、人間の活動によって他の地域から入ってきた生物のことを指す。外来種と聞くと、海外から日本に入ってきた生物のことを考えてしまう傾向にあるが、日本の生物が海外に入った場合や国内でも県をまたいで入った場合にも使われる言葉である。

生物が新しい環境でも生息することができるのは、環境のほかに、生物が個々の生態的特徴を持っているからである。

今回は、移動した生き物計5点の生態的特徴を展示する。例としてブラックバス・ホテイアオイ・ホンドタヌキ・コイ・クズを取りあげる。

新しい環境で、生き物は自身の生態などの適応力により、様々な環境で生活することができる。そんな生物の持つ特徴を踏まえながら、生物の適応力や生命力という視点をもって身の回りの生き物を見る機会に繋げることを目的とする。

博物館実習企画展示の様子



1 班

企画展示発表会、来館者展示解説の様子



2 班

